

友よ 第三回

赤神 諒



第三章 岡豊の春

——天正七年（一五七九年）一月、土佐国・岡豊



土佐の川が清らかなのは青空のおかげだと、死んだ渡はきっぱり断言していた。

透き通る空と川を連日眺めていると、本当のように思えてくる。

幼い頃の弥三郎にとって、川は特別の場所だった。

土佐の夏は暑い。傅役の福留親政は、岡豊城に住まう家臣団の

子弟たちも交えて川で水練をした後、川遊びを許した。弥三郎はふだん大人相手の稽古事続きだったが、夏のこの時期だけは齡の近い童

友よ 第3回

たちと思う存分、川遊びができた。川には楽しい思い出がたくさん詰まっている。

昼下がりに春の気配はまだないが、穏やかな日差しが縁側に温もりを届けていた。

「彦十郎、極楽のように心地よいぞ。お主も来んか？」

寝転がったまま叫んだが、返事はなかった。学問の世界に入り込むと、聞こえぬらしい。

岡豊城の南面、石清川いわしがわに突き出た小丘にある二階建ての屋敷を、信親は冗談めかして「出丸でまる」と呼ぶ。いざこの城が敵に攻められたなら、実際、真っ先に戦場となるだろうが、その心配は皆無に等しかった。幾つもある空き部屋のうち、北側の一つでは、谷彦十郎が山と積まれた書物の狭間で寝起きしている。谷家の屋敷は巨城を挟んで岡豊山の北麓ほくろくにあるが、遠いため不便だから、信親と一緒に住むよう強く誘った。

時間を見つけて、信親は南の石清川に面した広間の縁側で、日向ぼっこをする。信親衆が皆で使う広間だが、声を掛けない限り、彦十郎は来ない。

藤目城の戦いから戻って、ひと月ほどが経つ。凄惨な初陣だった。目を瞑つむると、今でも真っ赤な鮮血が瞼まぶたの裏に浮かび、血の嫌な臭いまで鼻先に蘇ってくる。夜も明かりを灯して眠るようになった。おろん「夜が怖い」などとは誰にも言えぬ。

友よ 第3回

にゃあと、また猫が鳴いた。戦から戻ってみると、出丸の軒下に猫たちが住み着いていた。賑やかなのは好きだが、時おり漂ってくる小便の臭いには閉口していた。

玄関のほうで明るい女の音がする。

「まあ、若さま。さような恰好をなさっていたら、鼠先生に叱られますよ」

やがて耳にキンキン響く甲高い声が広間へ入ってきた。弥次郎の姉で、ひとつ年長の従姉、お福だ。野苺や枇杷などちよっとした美味の届け物をしたり、用がなくても出丸にふらりと立ち寄る。

「なあに、桑名は今、讃岐だ。奴が俺を叱りに戻るまでは、こうしていられる」

お福は声を立てて笑いながら、信親の頭から少し離れて同じ陽だまりの中に座った。お気に入りの露草色の小袖を着ている。

かつて桑名太郎左衛門は、元親の命を受け、京の都で三年間へ小笠原流礼法を学んだ。帰国するや信親の師として付けられ、毎朝、夜明け前から諸礼を伝授しに現れた。真面目ひと筋の口うるさい男で、何事にも手を抜かなかった。ある日、城内で用便している猫を見つけた桑名は、駆け寄って叱責し、逃げ出す猫を追いかけて、懇々と早口で説き聞かせていたと、お福は笑ったものだ。鼠顔の桑名が、逆に猫を捕まえようとする姿も滑稽なのである。

讃岐攻めの後、桑名は藤目城にとどまり帰国していない。信親はこ

友よ 第3回

の五年で十分に礼法を身につけたはずだが、桑名は「まだまだ、本番はこれからですよ」と言い張り、「戦の後が楽しみですよ」と手ぐすねを引いていた。「桑名」と聞くだけで、背にぴたりと板を貼り付けた礼法が歩いているような鼠顔の小男が、目に浮かぶ。

「桑名はともかく、父上か忠兵衛あたりが、また誰ぞに俺を見張らせておるやも知れぬ」

「土佐にとっては、誰よりも大切な御身おんみですもの」

出丸の警固は、元親の指図でかねて万全のはずだが、信親が吉野川の辺で命を狙われた一件を聞き、元親は大いに信親の身を案じている様子だった。

「そういえば、お福殿。岡豊で妙な小男を見かけたら教えてくれ。そのまま闇に溶け込みそうな濃鼠こいねずの野良着姿で、鼠先生よりも小柄だ。長宗我部で最も腕の立つ忍びらしゅうて、俺も命を助けられたが、残酷ゆえあまり好かぬのだ」

忠兵衛に尋ねてみると、入江左門は戦の間だけ信親の近くに配したとの答えて、実際、近ごろはあの濃鼠を全く見かけなかった。忠実な忍びを叱りつけて内心済まない気持ちもしていた。入江がいないのに、帰国後もたまに誰かの視線を感じるの、初陣で受けた心の傷のせいかな。

「若さまが嫌われるとは珍しいですね。でも、わたしなどに見つかる忍びではないのでしょうか？」

友よ 第3回

「そいつもそうだな」

お福ほど戦に縁遠い女子もいまい。弟と違ってふくよかな体つきで、動きものっそりしていた。

「初陣から戻って、弥次郎もますます頑張っておりますよ」

「あいつは見かけによらず、筋がよいのだ。背もまだ伸びる。必ず強くなるぞ。彦十郎と共に俺の片腕だ」

「若さまをお守りできるようにと、毎日必死で稽古に打ち込んでおります。あの優しいだけの弟が武芸に励むなんて、おかしな世の中ですけれど……」

一門衆波川^{はかわ}家の嫡男として、弥次郎は藤目城攻めでの不甲斐ない初陣を猛省し、「一人前になるまで、龍笛^{りゅうてき}を手にしなさい」と波川家中の者たちに誓ったという。

「俺は必ず今の狂った世を終わらせると決めた。手始めに、四国だ」
「こうして皆、大人になってゆくのですね……」

幼馴染の従姉弟だが、男は元服して武将となり、女は嫁ぐ年頃になった。いつまでも気楽な身ではない。

「次のお稽古は、いつでございますか？」

信親は幼時から、父や師たちの期待に応えようと、ひたむきに日々を生きてきた。武芸全般と軍学の指南を預かる福留親政を筆頭に弓、鉄砲、馬、剣、槍、薙刀^{なぎなた}はもちろん、太鼓に鼓、囲碁、和歌、謡、笛、蹴鞠に連歌、礼法など、師は入れ替わり立ち代わり、毎日幾人も

友よ 第3回

現れた。元服をきっかけに館から出丸へ引越し、親政が伊予で戦死して、今は稽古事も半分近くに整理した。近ごろは最も口うるさい桑名が不在のおかげで、ゆったり過ごせる時間もできた。

「次はもうすぐ、隼人が来る」

「昔から若さまは、引っぱりだごでございますものね」

「いや、この前の戦で、俺は敵将相手に手も足も出なかった。ゆえに、俺のほうから稽古を付けてくれと、改めて隼人に頼んだのだ」

元服前まで、信親は学問と稽古漬けの日々が当たり前だと思っていたが、日ノ本広しと言えど、信親ほど徹底して帝王学を叩き込まれた御曹司はいまい。

「俺なんぞのために皆、懸命に教えてくれる。期待に応えねばな」

寝転がったまま、右の拳を宙へ突き出す。その拳を、温かい両手がそっと包んだ。

お福が泣き出しそうな顔で、信親を見ている。

近すぎて気付かなかったが、お福はどちらかと言えば美人に分類できた。笑うとすぐに無くなる細い垂れ目は愛嬌があるし、それだけ見れば少し大きすぎる鼻も、福々しい頬も、顔全体の作りとしては嫌味がない。観音像を思わせるいつも穏やかな口もとは、常に笑顔を作る支度が万全で、実際よく笑った。見慣れると、ずっと見ていたくなるような顔立ちだった。

信親は半身を起こして、座り直した。自然に腰と背筋が伸び、顎を

友よ 第3回

引いて指まで揃えてしまうのは、桑名の躰しつけのせいだ。

「本日は、若さまに一つお知らせがあって参りました」

お福が慎ましやかに、信親に向かって両手を突いた。

信親、お福と弥次郎の三人は昔からよく遊んだ。信親には姉が一人、弟と妹が三人ずついるが、姉はすでに嫁ぎ、一番近い二つ下の弟は病がちで、他の五人は皆、齡が離れすぎていた。

面おもてを上げたお福の顔から笑みが消えている。信親はすぐに用向きを察した。

「このほど、嫁ぎ先が決まりました」

昔からお福には細やかな気遣いがあった。優しさと心配りの本当の理由に気付いたのは、元服した後だった。

「それはめでたい。相手は？」

お福は辺りを見回して耳を澄ますような仕草をしたが、聞こえるのは、唄を急いで歌っているような磯いそ鳴なびの轉まわりだけだ。

「谷彦十郎さまにございます」

甘いものと苦いものを、同時に口に入れたような心地がした。

「少々、口は悪いが、俺の惚れている立派な男だ」

お福が嫁ぐ相手は本物の男であって欲しいが、彦十郎なら文句なかった。谷家は重臣の仲間入りはしても、神官出身の新参で、所領もまだ小さい。家中でさらに大きな力を持たせるべく、元親の姪と縁組させるのは、長宗我部にとっても望ましかった。非の打ち所のない縁

友よ 第3回

組と言える。

「お人柄は存じ上げております」

いずれ決まる信親の正室が家臣の娘でないことだけは確かだった。お福の波川家は一門衆であり、二人はすでに血の繋がる従姉弟同士だ。縁組で改めて絆を深める必要はなかった。一門衆の娘をあえて側室とする理由もない。その意味で信親とお福は、最初から決して結ばれえぬ間柄であり、二人ともそれをよく知っていた。

「こうして若さまをお訪ねするのも、今日が最後にございます」

二人は互いに分かり合い、労わり合いはしても、心の内を明かしたことはない。

——これで、よかったのだ……。

打ち沈む気持ちをごまかすように、ありきたりの言葉を吐いた。

「彦十郎は幸せ者だな。必ずやお福殿を幸せにしてくれよう」

笑みを作ろうとしたお福のふくやかな頬に、ひと筋の涙が流れた。



二

出丸の庭で向かい合う二人の半裸からは、湯気が立っている。冬でも、諸肌脱ぎだ。

獰猛な羆どうもろうを思わせる隼人と互角に戦えれば、信親は四国でも最強の武人になったと言える。

隼人が渾身の竹槍を突き入れてきた。ぎりぎりかで躲かして払い、足を狙って素早く槍を回転させる。が、隼人は跳躍して、足払いを避け

友よ 第3回

た。

「お見事じゃ、若。あの戦で、ひと皮剥けましたな」

一刻にわたりほとんど休みも入れず、互いに容赦なく渾身の力で打ち合った。戦場では待ったなしだ。敵が大軍なら、倒してもすぐに新手が現れる。休憩無用の鍛錬が隼人独特の指南法だった。器用な弥次郎に頼み、穂先は怪我をせぬよう布で細工してある。

井戸端で汗を流した。冬でも、火照る体には冷水が心地よい。

濡れた体を乾いた手ぬぐいで拭きながら、二人並んで縁側に腰掛けた。今日も土佐は晴天だ。

「若も相当強うなられた。御館様もいたくご満悦におわしますぞ」

「俺はまだ、満足しておらぬ」

「御曹司がこれ以上、技を極める必要はござらん」

隼人は信親の武芸の師である前に、元親の忠臣だった。福留家の

田辺島城たなべじまじょうは石清川の河口近くに建ち、岡豊からも近いが、たいてい

主家の居館にいる理由は、元親の腹心だからだ。もともと警固のため傍らに仕えていた隼人が主君から全幅の信頼を得たのは、ある出来事で若き隼人が元親を強諫して以来だった。まだ土佐を統一していないころ、酒を巡ってちょっとした事件があった。

土佐人の酒好きは度を越している、酒豪の元親以下、ほとんどの長宗我部侍がその例に漏れなかった。しかし岡豊城下で、酒席の些細な口喧嘩から乱闘になった事件を機に、元親は城下での飲酒を禁ずる

友よ 第3回

と令を発したのである。

そう言われても、酒なしで土佐人は生きてゆけない。城下は静まり返って、飲めぬ憂さ晴らしから口論となり、またもや乱闘騒ぎが起る始末だった。

禁酒令から数ヶ月経った、とある明け方、隼人は幼い弥三郎と二人、石清川の河原で大太刀を振って鍛錬していた。時間のない弥三郎を師たちが取り合っており、礼法を教える桑名が現れる前、まだ未明のうちから、武芸の稽古を始めていたのだった。

二人が川辺で打ち合っていた時、暁闇きょうあんに紛れて大橋を渡り、城へ向かう幾つかの人影に気付いた。大樽を荷車で運んでいる。すわ敵の工作かと不審に思った二人は、肌脱ぎのまま影を追ひ、大手門の前で追いついた。

——その樽は、何じゃな？

巨漢の銅鑼どら声こゑに、商人らしき男は震え上がったが、答えない。隼人が勝手に樽の蓋を開けて、中の匂いを嗅ぐと、酒である。

——なぜ、お城に酒が要る？

——お、御館様の御用にございます。

——何じゃと？ 酒が好物のわしでさえ令を守り、この三ヶ月というもの、一滴も飲んどらんじゃ。岡豊城下では、何人たりとも酒を飲んでならん。城にも、無用なはず。

隼人は片手で酒樽を軽々と持ち上げると、力の限り地面へ叩きつ

友よ 第3回

けた。樽板が砕け散る。もうひとつの樽が同じ運命を辿った頃には、酒臭の漂う中、人だかりが出来て騒ぎとなっていた。

商品を壊された商人が「福留隼人が乱心した」と奉行へ訴え出たため事は大きくなったが、この話を聞いた元親はひどく恥じ入った。家臣たちの前で自らの非を詫び、諫めてくれた隼人を称えた。その日のうちに禁酒令を廃し、御用商人のしきくい穴喰屋に用意させた美酒を家臣団に振る舞ったのである。ぶち壊した酒樽の板を踏んづけながら仁王立ちする隼人の姿を、信親は尊いと思った。そのたくま逞しい背に差し始めた曙光の眩しさを、今でも覚えている。

「ちと体が冷えて参ったな。続けるか、隼人」

信親が槍へ手を伸ばすと、隼人は太い腕を小袖に通し始めた。

「若、今日はこの辺でよろしかろう」

「いや、俺はまだいける」

「わしの体がもちませぬでな」

隼人はまだ三十路だ。元服した後、隼人の信親への接し方が変わった。それまでは鬼師範だったのが、主従をはっきりと意識させるようになり、以前ほどには厳しくしごかなくなった。最初は主筋への遠慮かと思っていたが、どうやら違う。

「あの将に、俺はまるで齒が立たなかった」

初陣で戦った新目弾正は、信親にとって生涯忘れえぬ将となった。

隼人は答えず、もう片方の袖に腕を通すと、帯を締め直した。

友よ 第3回

「教えてくれ。今のまま鍛錬を続けておれば、俺はいつ頃、あの男のようになれる？」

信親がじっと見つめても、隼人は視線を合わせず太い腕を組んだ。「むろん若なら、鍛錬次第で、さらに槍筋を極められましょう。されど、さように強くなって、どこで何をなさる？ 若は総大将となられるお方じゃ」

「いつか俺は、あの男のような戦をしたい。新目弾正はあの森と城で、まるで一頭の龍を操るがごとく五百の兵を自在に動かしていた。どうすれば、あんな芸当ができる？」

しばしば川は、龍に喩えられる。信親が見た新目勢は、清冽な水を湛えた一本の清流のようでもあった。たとえ名もなき小川であるうと、皆がそれぞれの思いを抱きながら、約束の場所を目指し一つになって流れ、未練も見せずに消えていった……。そんな気がした。

「若は万の大軍を動かすご身分じゃ。もつと他に、学ぶべきことがござる」

自らは帷幄にあつて、床几にどっしりと腰を落ち着け、家臣たちに戦わせる将もいる。だがそれは、信親の戦い方ではない。是非善悪でなく、生き方の違いだ。命のやり取りをする戦のまっ只中に将自らが身を置いた時、その軍勢は一頭の龍と化しうるのではないか。

信親は縁側から中へ入り、部屋の隅に立てかけておいた一本の槍を取って戻った。

友よ 第3回

「しかと学びましょう。だが俺はどうしても、この槍を使いたい」
隼人に差し出したのは片鎌槍だ。藤目城から持ち帰った、新目弾正の得物だった。月影を浴びたあの白銀の甲冑の輝きが、信親には忘れられない。

「二十二歳で敗死した敵将の槍なんぞ、不吉じゃ。やめられよ」

「吉凶など信じぬ。俺は初陣で真の将に出会えたと思っている」

隼人は苦々しげに何度もかぶりを振った。

「功成り名遂げた将を範となされい」

新目は運に恵まれなかった。もしも讃岐の小土豪でなかったなら、今少し長く生きられたなら、必ずや名を成したはずだ。

「実は太平おおひらにも頼んだが、扱えぬと断られたのだ」

かねて信親の槍術の師は太平いちろう市郎右衛門もんだったが、片鎌槍は扱いが特殊らしい。土佐では、武芸百般に秀でた隼人しか教えられまい。

「頼む、この通りだ」 信親は隼人に向かい、改まって頭を下げた。

「このような俺に育てたのは、お主ら父子だ。責めを負ってくれぬか」
信親が一度言い出したら聞かぬことを、隼人も長い付き合いで知っている。

「実はわしも昔、片鎌槍に惚れ申した。ちと扱いに癖がござるぞ。お覚悟召されい」

隼人はゆらりと立ち上がって、再び諸肌脱ぎになった。



三

友よ 第3回

お福と彦十郎の縁組が公にされると、信親は出丸で祝いの席をもうけた。昼下がりに始まった宴は、まさにたけなわ酣である。

「おい、三蔵。酒が足りんぞ」隼人の銅鑼声が響く。

宴席を手配したのはへ三蔵のこと、のっぽのとおち十市新蔵、ちびの松崎新蔵、でぶの津野新蔵の三人であった。

三人は御曹司の最側近を自称し、とさうい宿直として出丸に住み込み、信親に従って回っている。如才ない若者たちで、器用な弥次郎と一緒に竹細工を作って城下で売り捌き、小遣い稼ぎもしていた。ここしばらくは、それぞれ実家の事情で阿波攻めに駆り出されていたが、つい昨日戻ってきた。三人は齢も近く、たまたま名前が同じ「新蔵」だったせいで、仲良くなった。恐ろしい戦も何事も、三人寄れば怖くないと、たいてい一緒にいる。

本来、お福は年内にこしい輿入れをするはずが、彦十郎が占ったところ、谷家にとって大凶と出たため、運氣の変わる来年の節分以降に日延べすると決まった。かねて「お福殿を嫁に欲しい」という他家からの申入れが引きも切らないため、結納を済ませ、輿入れの予定だけ明らかにしたわけだ。

信親は一抹の寂しさを覚えながら顔には出さず、酒席にいた。

「いやはや、めでたいぞ」

十度目近くになろうか、隼人が繰り返した。この巨漢は酒好きを豪語する割には、少し飲んだだけで茹で蛸のように顔が真っ赤になる。

友よ 第3回

そういえば、父の親政も同じだった。

「彦十郎、お前もついに嫁を貰うんじゃない。よもやもう神官に戻りたいなどと抜かしはすまいな」

隼人が彦十郎の首に太い腕を巻きつけた。信親も酒に強いほうだが、彦十郎はどれだけ飲んでも変わらず、始終落ち着き払っている。

「妻帯しても、神官にはなれ申す」

彦十郎は酔っ払い相手に辟易へきえきした様子だが、祝いの席の主賓だけに中座するわけにも行かず、渋々相手をしていた。

「一門衆自慢の女子と縁組をするからには、神ではのうて、主家のため粉骨碎身するのが筋じゃろう。わかっておろうな、ん？」

大して飲んでいなくせに、隼人が喋るだけで部屋が酒臭くなる理由は、誰にも分からない。

「私が神官となり、神を長宗我部の味方に付けければ、恐れるものはありませんまい。神はたぶん福留殿よりも強うござるぞ」

「なるほど……そいつは頼もしいな」

隼人は太い腕を組み直して思案を始めた。真っ赤な顔をして、ちゃんと頭が回っているのか、はなはだ心もとない。

「……いや、違うぞ。神に仕えるのは別にお前でなくともよいはずじゃ。待たんか、彦十郎！」

「憚りはばかでござる」

逃げ出した彦十郎を追おうと、羆が片手を突いて立ち上がる。

友よ 第3回

「その辺でやめておけ。酔っ払いの説教ほど見苦しいものは少ない」
「何じゃ、若。わしはまだ、それほど酔ったりしませんぞ」

「顔が真っ赤だ」

「それはいつもの話でござる」

隼人が必死に弁明する姿が滑稽で、お福が笑うと、皆が笑った。
にぎやかで温かい時が流れてゆく。信親の大好きな場だった。土佐
だけでなく、四国に、全国にこの幸せを広げられぬものか。

——いや、身近にもまだ、深い悲しみが残っている。

「ときに隼人。せせらぎには、渡のことをまだ伝えておらぬのか」
隼人は酔いが醒めたように真顔に戻ると、困り顔でかぶりを振っ
た。

「実はまだでござる。何とも不憫でしてな」

仲間の漁師たちにも、桑名に頼まれて渡がまだ讃岐に残っている
と伝えてあるらしい。だが、知らせを遅らせたところで、渡が蘇りは
しない。

「俺から話してみよう。死なせたのは、俺の責めだ」

信親は盆の上にことりと盃を置いた。だが責めとは、何をすれば負
えるのか。



四

不機嫌そうに灰色の水をひた流す今日の石清川も、信親は好きだ
と言うのだろうか。

友よ 第3回

冬の川風が容赦なく襲いかかっても、信親は気付いてもいない様子だった。彦十郎の隣を歩く足取りに、いつもの軽快さはない。

岡豊城下町は、城のすぐ南を流れる石清川の対岸に大きく広がっている。

支流の笠ノ川かさのかわがわが北から流れ込んでくる辺りに、渡たちの住まいはあった。渡は愛妻を病で失ってから、せせらぎを育てるために川漁師たちの住まう長屋へ移った。石清川だけでなく、近くの物部川ものべがわや海辺にまで出張って、逞しく漁に精を出す連中だ。

「彦十郎は、まだ知らせぬほうがよかったと思うか？」

堤の途中で立ち止まった信親が、灰色の川を眺めながらぼそりと尋ねてきた。

「隠しても、真実は変わりませぬ」

快活な信親でも、遺児に対しどう声を掛けたものか、会う前は相当悩んでいる様子だった。

二人が訪うと、六歳の女童めらわは嬉しそうに信親に抱きついてきた。

信親は渡と川遊びから戻り、せせらぎが駆け寄ってくるたび、抱き上げていたらしい。父親の姿がないと気づいたせせらぎは、訝しげな顔つきで「わかさま、お父は？」と尋ねた。

信親にしては珍しく齒切れの悪い言葉で渡の戦死を伝え、形見の綱を渡し、よくよく諭した。隣人の漁師にせせらぎの世話を頼んだのだが、ひどく無愛想な老人はそっぽを向いた。

友よ 第3回

ちやうど川漁から戻った航八こうはちという九歳の孫の話で、事情がわかった。老漁師の息子たち三人は、土佐統一戦でことごとく死んでいた。航八の兄もだ。息子や孫を戦で奪った長宗我部を恨んでいるのだろう。浅黒い顔で利発そうな航八に、せせらぎの面倒を見てくれるよう頼んでから、信親は幼女を下ろした。

だが、せせらぎには死の意味がまだわからぬ様子だった。その証拠に、別れを告げる信親に対し、結局お父がいつ戻るのかと尋ねたのだった。

ハツとした顔で振り返った信親はしゃがみ込んで、涙を流しながら小さな体を抱き締めた。その時せせらぎは初めて、お父がもう戻らないのだとわかったらしい。大声で泣き始め、信親にすがりついた。

彦十郎は、寒風に打たれ続ける信親の整った顔を見た。表情は苦悩に塗まみれている。

いつかお橋おはしは、信親が民の心の痛みを知っていると聞いた。大名の御曹司は足軽の死を遺された者に告げるために、わざわざその家を訪れたりはしない。この若者がやがて大樹となれば、この世も捨てたものではなくなる、そんな気がした。

曇天の下、石清川はひたむきに灰色の水を流し続ける。

川べりで立ち止まった信親は風に向かい、抗うように立った。

「渡は俺のため、皆のために、命を使ってくれた」

荒い川風のなかで、信親の思いつめたような声ははっきりと聞こ

友よ 第3回

えた。

「ならば俺も、せせらぎたちを守るために、皆のために、この命を使おう」

その言葉に嘘偽りは感じられなかった。信親はいかに生き、死ぬるつもりなのか。彦十郎は寄り添うように、そっと信親のそばに立った。



五

初陣から戻ってふた月、岡豊山に吹く風が梅花の香りを含んで冬の終わりを告げても、石清川の清流が賑やかに音を立てても、今の信親には届かなかった。

信親の眼は、小柄な若い女に釘付けにされていた。

二十歳くらいと見ゆる女は、三日月形の淵に近い川べりで、腕の中の一匹の子猫とじゃれ合っている。

短めの髪は白いうなじを隠せていなかった。癖毛と寝癖のせいか、遊び毛が側頭から短い角のように突き出ているが、本人は気付いていない。飾り気のない小袖の白藍色はまるで、浅瀬を流れる川がゴツゴツした岩場に白く泡立つ様子をそのまま衣に仕立てたようで、地味な苔色の帯と響き合うように似合っていた。

春の日差しのおかげで、女のきめ細かな白肌は産毛まで見えそう。明るい茶色のトラ猫を見つめる眼差しは、戸惑うほどの幸せを持って余すかのように、控えめな優しさを宿していた。化粧もせず、紅べにも塗らぬ唇が遠慮がちな笑みを浮かべている。

友よ 第3回

子猫が桃色の小さな舌で女の顔を舐め出した。くすぐったがる女が、小刻みに声を立てて笑い始めると、信親もつられて、笑みをこぼした。

この女を以前に城内で見かけた気がした。いや、どこかの川べりか。戦から戻った信親は、毎晩のように悪夢を見ていた。呪詛の込もった片鎌槍を使い続けているせいか、目を閉じれば、藤目城の凄惨な光景が浮かぶ。乱世の理とはいえ、初めて人を殺めた。呆気ないほど簡単に人は死ぬ。弱音など吐かぬが、信親は鬱々として楽しまなかった。輿入れの決まったお福が、もう出丸を訪れなくなったせいもあるだろうか。

だが今、無邪気に戯れる女と子猫の姿を見て、信親は心の底から安らぎを覚えていた。

信親が女のいる河原のほうへ歩き出すと、後ろから慌てて三蔵たちが続く。

「そなたとは、前にどこぞの川で会ったな。川が、好きなのか？」
女がおもむろに、信親を見上げた。

母の石谷ノ方は細面の美貌だが、全く違う丸顔だ。信親の胸がどくどくと激しい鼓動を打ち始める。

贅を凝らした信親の肩衣姿とへ七ツ片喰の家紋、お付きの人たちを見れば、身分は一目瞭然だ。女は猫を河原へ下ろすと、信親に向かってその場で両手を突いた。たとえばお福のように優雅な所

友よ 第3回

作ではない。物怖じせず自然だが、少しばかり粗雑な仕草だった。

「これは失礼をいたしました」

甘え猫のように甲高いが、同時に落ち着いた艶もある大人の声だった。子猫は女にすり寄り、白い腕をぺろぺろと舐めている。

「俺は大の川好きでな。そなたも川が好きだと、嬉しい」

やがて面を上げた女の顔を見て、信親は驚きを覚えた。

悪戯な川風が油火の炎を消し去ったように、女の顔からはさっきの笑みが消え失せ、慄然とした表情に変わっていた。たとえばお福はいつも幸せを分けてくれそうに福々しいが、女は幸せをこっちから分けてやりたくなる表情だった。貧相というより、禍々しい顔つき^{まがまが}でも言うべきか。先刻とはまるで別人の冷たさがあった。

「……たぶん」

女は考え込むでもなく、虚ろな目で信親を見上げた。今という時が、ただ何事もないまま早く過ぎ去ってほしいと願うかのように、投げやりな目つきだった。

「自分の心なら、わかるはずだ。川を好きか、嫌いか、いずれかではないのか」

「……いずれかと問われれば、きっと好きなのだと思います。川は人ではありませんから」

変わったことを言う。嫌々ながら経を棒読みでもするような女の返事は、やる気のない川が立てる単調な音にも似ていた。全く関心が

友よ 第3回

ないものを眺めているように、目から輝きが消えている。月明かりのない夜に川が色を失ったような黒い瞳からは、冷たさしか感じられなかった。

信親は女の変わりように面食らったが、それでも明るく問うた。

「俺は長宗我部の跡継ぎだ。そなたの名は？」

「るい、と申します」

落ち着き払ってはいるが、繰り返し叱られて申し開きを諦めた子供のように目を伏せていた。

「猫が好きなのか、るい？」

るいはまだ腕にまとわりついている子猫を邪険に追い払いながら、無愛想に応じた。

「さあ……」

それでもじゃれついてくる子猫を、るいが脇へ押しやると、信親は笑い出した。

「今しがたはあれほど可愛がっておったではないか。猫のほうはそなたが大好きのようだぞ」

信親はるいのすぐ前にしゃがみこむと、両手で子猫を拾い上げた。軽い小さな命が、信親の手の中でおぼろげに光る。このままでは命を取られると確信でもしたように、必死でもがいていた。

「おい、暴れるな。俺に悪意はないぞ」

「猫を好きなのかも知れませんが。人は大嫌いですけど……」

友よ 第3回

さりと出た女の言葉が、信親の心の中で引っかかった。

「そなたはなぜ人間が嫌いなのだ？」

るいは胡散臭いものを見るような顔つきで信親に問い返してきた。

「どうして、人間などを好きになれるのですか？」

全く腑に落ちぬ様子るいに、信親は笑顔で話しかける。

「一人きりでは寂しいが、誰かといれば、楽しいではないか」

子猫が信親の手の中でますます暴れた。

「るいは上手にあやしておったのに、難しいものだな。どこを撫でてやれば、喜ぶのだ？」

「頭のとっぺんや顎の下など、喜ぶこともございますが、今は気が立っておりますから、何をやっても無理でしょう」

退屈な川の流れにも似たるいの口調に変化はない。

「るいは猫に詳しいのだな。おい、猫。お前はなぜさように怒っております？ ——痛ッ！」

差し出した指に痛みが走った。すぐに引っ込める。

信親の手からの脱出に成功した子猫は、素早くるいの後ろへ回り込んだ。

「今はちょうど歯が生え変わる時期で、手当たり次第に物を噛むのです」

るいは病的なほど白い両手を差し出すと、信親が握り込んでいた

友よ 第3回

左の手指を開いた。ヒヤリとするほど冷たい指先だ。るいは噛まれた指を見ていたが、やがて低い声で付け足した。

「ご懸念には及びませぬ。じきに痛みも引くでしょう」

一切の媚びへつらいもない代わりに、るいの態度には無関心と紙一重の冷たさがあった。

「そなたはどこに住んでいる？ 城の者か？」

「少し前から、石谷ノ方さまのもとにお仕えしております」
意外に身近にしていると知って、心がときめいた。

「母上の所におるのか。さればまた会えるな、るい」

女に微笑みかけながら、信親は立ち上がった。

「俺は稽古事で城へ戻るが、また猫のことを教えてくれ」

るいは訝しげな顔で信親を見ていたが、やがてかすかに頷いた。るいの足元にまわりつく子猫が甘え声で、にゃあと高く鳴いた。



六

広間の片隅に陣取った彦十郎は、杯をさかずき一気に干すと、また手酌で酒を注いだ。酒は世の憂さ晴らしに欠かせない。実は学問の合間にも、たまに一人で飲んでいる。

出丸には家臣団の子弟たちが集い、飲めや歌えの宴の最中だ。

御曹司に取り入ろうと、酒を注ぎに行く馬鹿げた行列ができ、下しくそな舞を披露する者まで現れる始末だった。若い連中ばかりが三十人余りも集うと、賑やかというより、真夏に蝉たちが鳴き喚いてい

友よ 第3回

るように喧やかましい。

正面の上座には信親と並んで、一人の若い女がニコリともせず座っていた。「黄泉よみの国からやって来たのだ」と悪評が立つくらい、るいは陰気な侍女だった。信親は「笑顔が良い」と繰り返すが、いつも笑いとは程遠い顔つきをしていた。

隠し立てのできない信親は、「俺はるいに恋してしもうた」と周りに打ち明けた。彦十郎は同行しなかったが、ひと月ほど前、石清川の辺で子猫と戯れるるいの姿を見て、恋の虜とりこになったそうだ。

信親はるいを出丸へ呼び、信親衆に引き合わせた。かねて信親は追従ついでを嫌い、齒はに衣着せぬ諫言かんげんを歓迎したが、さっそく隼人が、身分が違う、陰気だ、不気味だ、気が触れているなどと諫めると、さすがの信親も腹を立てて、隼人とかみ合いの喧嘩にまでなったのが数日前の話だった。

顔立ちこそ際立って美しいが、るいはひどく変わっていた。問われれば、面倒臭そうな口調で短く答えもするが、自分から何かを話したりはしない。絶対に笑わないと決めたような能面で、まるで人形のように心が感じられなかった。

信親は何かにかこつけて石谷ノ方のもとを訪れては、るいと会い、出丸に居ゐっている猫を何とかしてくれと頼んで、るいを連れ出した。弥次郎がしばしば付き合わされ、出丸で信親と同居する彦十郎も自然、るいと顔を合わせた。見た目こそ幼く見えるが、るいは氏素性

友よ 第3回

の知れぬ年増で、浦戸うらとの港で遊女をしていたという噂まであった。

「谷殿、かような所におわしましたか」

酒瓶を持って現れた弥次郎が、彦十郎の隣に端座した。

「この下らぬ宴は、いつ終えるのだ？」

吐き捨てるように問うと、弥次郎は困ったような顔で首を傾かしげた。

「三蔵の頑張りもあって、なにぶん盛り上がっておりますゆえ」

るいを笑わせ元気付けてやろうと、信親が三蔵に指図して家臣団の子弟を集めたのだが、「われこそは」と上座へ向かう行列ができ、すでに二巡目に入っているという。

「それで、あの愛想のない女子は一度でも笑ったのか？」

信親は一途な主だった。ちょうど川に似ている。一度流れると決めれば、止まらずそのまま流れ下る。幼時から信親は稽古事に武芸に、あらゆる物事に満身の力で取り組んできた。「手を抜く」という知恵も習慣もないらしく、この恋にも全力を投じている様子だった。

「いえ、今のところは、まだ」

己のせいでもなかるうに、弥次郎は済まなそうな表情で上座を見やっていた。今日、この宴に彦十郎が長居しているのは、「若様を何とかしてください」と弥次郎に頼み込まれたからだ。

信親を含めて周りの連中は大笑いしているが、るいは愛想笑いひとつ見せなかった。相手が追従しないと、信親はかえって評価してしまいうから、厄介だ。

友よ 第3回

「谷殿でも、若様を諫められぬのでござるか？」

「恋に溺れる者に付ける薬は、ない」

彦十郎もると話したが、その態度は腹が立つほどつつけんどんで、汚い物でも見るような冷たい目つきには、彦十郎でさえ背筋がひやりとした。何を問うても、るいの受け答えは否か応かを明らかにする程度で、せいぜい「さようですか」くらいしか言わなかった。

上座のほうで、三蔵を中心にひとときわ大きな哄笑が起こった。

笑いの渦の中で、るいだけは退屈そうにあくびを噛み殺すような顔をしている。

「若様がそんなにお好きなら、夫婦めおとになれぬものでしょうか」

「無理だな」

この恋の芽は早晚、必ず摘み取られる。長宗我部の御曹司には、許されざる恋だった。

国主の御曹司が、見初めた領内の娘を側室とするのは珍しくもない。だが、一途な信親はかねて「側室を持たぬ」と宣言していた。実際、父の元親も側室を置いていない。父を深く敬い、範とする信親が、父を差し置いて側室を持つことは、信親の気性からしてありえなかった。そもそも長宗我部にとって、御曹司の縁組は、極めて重要な政治上の意味合いを持つ。

「お可哀そうに……」

泣き出しそうな顔で上座を見る弥次郎も、哀れなほど人の好い若

友よ 第3回

者だ。

やがてついに宴も果てて、るいを侍女部屋へ送り届ける信親に、彦十郎と弥次郎も従った。その帰途、三人はずっと無言だった。

高く昇った佳月が見下ろしている。

出丸まであと少しの見晴らしの良い木段の踊り場で、信親が立ち止まった。眼下には石清川が月影を浴びながら静かに流れている。

「彦十郎は、るいをどう思う？」

「諦めなされ」との即答に、信親は小さく笑った。

「それが、俺の軍師の見立てか。弥次郎はどうだ？」

しばしの沈黙が流れてから、おずおずした返事が聞こえてきた。

「誰と結ばれても、若様は幸せにおなりでしょう。でも、あのきれいな女性にょしやうは、若様でなければ、幸せにできないような気がいたします」

うまい言い方だと彦十郎は思ったが、幸せになれぬ人間など、世に掃いて捨てるほどいる。

「なぜ、そう思う？」

「るい殿はすっかり心を閉ざしています。でも若様なら、心を開いてあげられる。もし笑えば、とても素敵な笑顔になると思います」

「俺はるいの笑みを見た。子猫を可愛がっておる姿は、まるで麗うるわしき天女のごとくであった」

「乱世で好き合う男女が結ばれ、幸せになるなぞ、幸運が重なり続けねばありえませぬ」

友よ 第3回

彦十郎は運よく相思相愛の女と結ばれたが、すぐに失った。

「俺に付けられた二十二人の師は、誰も恋を教えてはくれなんだ。だから今、学んでいる」

信親は月を見上げながら、ぼそりと呟いた。



七

幸せとは不思議なものだ。悩まされていた悪夢は跡形もなく消え失せ、夜も怖くなくなった。

たったひとり、心惹かれる女性がそばにいるだけで、人生はこれほども輝くのか。

出丸の縁側にいるいと並んで早春の陽だまりに座っていると、信親は乱世にいることを忘れてしまう。るいは日向でまどろむ三毛猫と見つめ合っていた。

「近ごろ城内で猫を見かけぬな。夜な夜な隼人あたりが捕まえて食っておるのやも知れん」

信親がおどけても、るいはにこりともしなかった。

出丸に居ついていて猫たちは、るいの助言で躡ができ、今では一緒に餌付けをしている。彦十郎は気を利かせてか、どこぞへ出かけていた。占筮せんせいにも通じている彦十郎に、「俺とるいが夫婦めおとになれるか占ってくれ」と頼み込むと、渋々応じたが、やはり縁はないと出た。天地がひっくり返っても、夫婦にはなれぬらしい。それでも信親は「運命など、変えればよい」と開き直った。

友よ 第3回

「なあ、るい。川がどこから来て、どこへ行くのか、知りたいとは思わぬか？」

るいは押し黙っているが、しばしの付き合いで、沈黙は否の意味ではないと信親は気付いていた。

「下流はわりと簡単だ。石清川は浦戸湾に注ぐ。波を寄せては返す海の大きさもむろん好きだが、俺は未練もなく流れて去る川の潔さに、惹かれるのだ」

土佐は大きく豊かな海を持つが、岡豊城からは二里ほどもあり、かねて稽古事の多い身では行く余裕がなかった。他方、住まいの眼前には石清川が流れている。夢中になって川で遊ぶうち、体が浮かぶのを感じ、以来泳ぎを覚えて、さらに川を楽しんだ。

信親は岡豊の東を流れる物部川を辿った思い出も、るいに語った。「だが、上流を辿るのは難しい。幾つも支流が合わさって来るし、滝に出くわせば進むのも厄介だ。隼人は昔、濡れた岩の上で足を滑らせて、腕の骨を折ってしもうた。以来、川巡りはもう勘弁してくれと言う。俺は独りで遠出が許されぬゆえ、付き合わされる家臣たちに苦勞を掛けて済まぬと思っている」

そういえば、雪を被った川を見たいと信親が言い出し、桑名が渋々同行したところ、木橋の途中で躓いて、真冬の川へ落ちてしまい、寒さに震えながら岡豊へ戻った後、高熱を出して寝込んだ事件もあった。

友よ 第3回

「初めての川へ行く時は、まず物知りの忠兵衛に尋ねる。息子の彦十郎は、俺と一緒に住んでいながら、まだ川の良さに気付いておらぬから、困ったものだ」

一侍女が長宗我部の重臣たちを知るはずもないから、一人ひとり面白おかしく人物を紹介しながら、信親は語り続ける。

るいもきちんと聞いてはいて、同意を求めると、かすかに頷く時もあった。

「忠兵衛によれば、四国はもちろん、日ノ本には数え切れぬほどの川がある。いずれ皆で太平の世を掴み取った暁あかつきには、忠兵衛の案内で各所の川を訪ねようぞ。今から楽しみでならぬ」

信長には会ったことがないが、天下に最も近い大名であり、一代の英傑に違いなかった。その信長から偏諱へんきを与えられた「信」の一字を、信親は誇りに思ってきた。織田家臣に「信」の字を冠する者も多いが、信長が正式に偏諱を与えたのは、信親のほかに高位の公家である近衛前久このえさきひさの長子信輔のぶすけだけらしい。元親と話したことはないが、もう戦をせずに済むのなら、信長に天下を取らせれば良いと信親は考えていた。大事なものは、乱世の終焉だ。

「若さまはどうして、川の話ばかりなさるのですか？」

しごく稀だが、最近はあるいから尋ねてくることもあった。そんな時は胸が弾む。

「好きだからだ。俺が毎日るいのことを、誰彼構わず話しているのも、

友よ 第3回

そなたを好きだからだ」

るいが信親をまじまじと見つめている。

信親は急に恥ずかしくなって、話題を川へ戻した。

「偉そうな口を叩いても、俺はまだ土佐一の四万十川しまんとがわに行ったことがない。とにかくゆっくりと流れるらしいのだ。白い砂洲もきれいでな。鮎も鰻も獲れる。波川家が中村の城代をしておるゆえ、暇な弥次郎に様子を探らせたが、四万十は空よりも青いと自慢していた。ところが、中村でも儲けておる穴喰屋は、緑だと言っておってな。いづれが真か、確かめねばなるまい」

隣に目をやると、るいは猫でなく、信親を見ていた。

「四万十にはへ赤目」という幻の魚がいる。先だって弥次郎の聞いた話では——」

鯉をも食らう凶暴な魚で、人ほどの大きさがある。体は銀色に輝き、目は真っ赤だ。昼間はどこかに隠れ、夜、深い淵を泳いでいるという。

「俺は子供の頃から猿猴えんこうを探し続けてきたが、四万十には間違いない棲んでいる。実は弥次郎が猿猴と言葉を交わした老人に会った」

るいが初めてわずかに顔色を変えた。

「おお、そなたも猿猴に関心がありそうだな」

「猿猴なら、人間ほど悪い真似はしないでしょから」

落ち着き払った妙な答えに、信親は面食らった。人嫌いのるいの過去には、何があるのだ。だが、るいが何かを言うのが嬉しくてならな

友よ 第3回

かった。

「るい、この春、桜が咲いたら、共に四万十へ参るぞ。弥次郎が案内する。赤目を見つけて、猿猴にも会う」

「猿猴に会って、何をなさるのですか？」

「よくぞ聞いてくれた。俺は長年、猿猴の正体を突き止めたいと思ってきた。だが、今は違う。友になりたいのだ」

「友、に……？」

「そうだ。約束だぞ、るい」

るいがわずかに、しかし確かに、頷いた。



岡豊城の南面、家老屋敷の並ぶ曲輪くわを探しても、梅の香りはどこにもなかった。綻ほころび始めた桜花は、あと五日もすれば満開だろう。

彦十郎が父忠兵衛のもとを辞して、出丸の曲輪まで来ると、弥次郎が心配そうな顔つきで待ち受けていた。戦場では頼りないが、主君思いで、意外に役に立つところもある。

「若はどんな塩梅あんばいだ？」

「相変わらずお加減は優れませぬが、また文机ふづくえへ。お気の毒でなりませぬ」

「恋ばかりは、理詰めでは行かぬものだからな」

元親と忠兵衛は、信親と長宗我部の行く末を案じ、無用の恋の芽を摘むべく手を打った。

友よ 第3回

半月余り前、信親は母に呼ばれ、るいとはもう会わぬようにと諭された。世に信親ほどの孝行者も少ない。石谷ノ方は近年寝たり起きたりで、元親が年に幾人もの薬師を岡豊に呼ぶせいもあって、あと数年の寿命ではないかと案ずる声もあった。その最愛の母からの懇願を断りきれず、元親の選んだ女子を正室にすると約束したらしい。るいも奥へ下げられ、広い岡豊城内のどこかにいるのか、それとも他所へやられたのかさえ、わからなくなった。

その日以来、信親は食べ物がほとんど喉を通らなくなった。懸命に試みるのだが、無理に食べては、戻した。夜も眠れぬ様子で頬もこけてきたが、数日前、槍稽古の最中に倒れた。いたって壮健な信親が突然臥せた原因は、失恋以外にない。

長宗我部はこれから再び讃岐を攻める。彦十郎が忠兵衛と談合していたのも、その準備のためだった。

「川へお誘いしてみたのですが、気乗りせぬと。これは相当重い恋煩いわざらでござる」

新しい恋をするのが一番手っ取り早い薬だろうが、あの一途さでは、正室を輿入れさせるしかなさそうだった。元親は実際、本腰を入れて嫁選びを始めている。

「世話の焼ける主だあるじ」

彦十郎が出丸の中へ入ってゆくと、弥次郎も従った。

信親は病床から起き上がって、褥しとねのすぐそばまで寄せた文机へ向

友よ 第3回

かっていた。石谷ノ方には「もう会わぬ」と約したが、文を書くなら構わぬはずだと屁理屈をこね始め、るいへの手紙を書いている。もつとも、るいの居場所が知れぬから、届けようのない手紙だった。

「おお。息災にしておったか、彦十郎」

信親の顔は青白く、頬骨が浮き出ている。近ごろ彦十郎は兵糧と矢玉の調達、軍役の割当、陣触れと物見の差配などに忙殺され、忠兵衛と共に宗家の居館に何日も泊まり込んでいた。

「家臣より、ご自身を案じなされ」

「すまぬな。るいを諦められるかと思うたが、甘かった。心と体が言うことをきかぬのだ」

信親の悲痛な訴えが、哀れを誘った。

再び文机に向かい、やがて恋文を書き終えた信親は、疲れ切ったように褥へ倒れ込んだ。弥次郎が慌てて搔卷かいまきを掛けてやる。

「全身全霊で忘れようと努めたが、できなんだ。どうしても、るいを想うてしまう。毎夜、夢で会うようになった。起きて現うつに戻ると、嫌になるのだ」

「あの女性にょしやうはもう、この城にはおりませんまい」

彦十郎は忠兵衛からるいの所在をうまく聞き出すよう、信親から頼まれていた。せめて文を届けたいとの思いだったが、彦十郎は何もしなかった。未練がましい文を届けたところで、何も生まれぬ。諦めさせるのも、家臣の大事な務めだ。

友よ 第3回

「愚父によれば、るい殿は字を読めぬとか」

信親の目から、みるみる涙が溢れてきた。

「そうか。字なら、俺が幾らでも教えてやるものを……」

会うことさえ許されるなら、信親は本当に字を教えてやっただろう。海千山千の忠兵衛から聞いただけで、彦十郎も真偽は知らぬが、貧しい出の端女はしためなら、字を読めぬ者のほうが多い。

「男にとって人生の憂さを晴らしてくれるのは、女と酒。女には手を出されまいゆえ、酒など如何いかでござる？ 伊予の酒でへ不如帰ほととぎすなる旨い澄み酒が流行っており申す。実は私も、多少気になっておりましてな」

品行方正な信親は、過ごしはしないが、酒を好み、楽しむ。

「そいつは、どこで手に入る？」

「宍喰屋に頼めば、世に買えぬ物はないとか」

浦戸を拠点とする〈宍喰屋〉は、四国全域にまで手を広げる土佐一の商人だ。もともとは堺とも交易する阿波のやり手の材木商人だったが、元親が世に出た当時、土佐商人はあらかた他家に抑えられており、後発の長宗我部が食い込めなかった。そこで元親は、すでに阿波で成功している宍喰屋に土佐での商いを勧め、これが大いに成功したのである。今や土佐での大きな商いは、長宗我部と共に成長してきた宍喰屋にほぼ牛耳られていた。

「やはり、やめておこう。失恋して、当てつけのように酒に溺れでも

友よ 第3回

すれば、父上と母上に申し訳が立たぬ。桑名にも、酒は楽しんで飲めと教えられた」

信親が臥所ふしどから手を伸ばしてきた。

「川へ出たい。肩を貸してくれぬか？」

出丸を出ると、春の夕光を浴びた岡豊城の望櫓のぞみやぐらが、高みから三人を見下ろしていた。



九

穴喰屋が出丸へやって来るのは、決まって彦十郎が不在の夜だった。その時を狙っているのか、単に彦十郎が多用で不在がちのためか。「恋ねえ……。それはまた、厄介なご注文にございやすな」

眼前で指の先だけ丁重に手を突いた男、穴喰屋はやぶにらみの目で、信親を訝しげに見つめたまま、瞬まばたきひとつしなかった。白髪の混じった初老の男の眼は、はたしてそれで視点が定まるのか案じたくなるほど、左右で大きさが違った。右眼は左眼の三倍ほどもあるうか。

「難しいのは百も承知だ。簡単な話なら、お前には頼まぬ」

「なるほど。恋とはまた、懐かしゅうございやす」

相当な醜男しこおだが、昔はちゃんと恋をしたらしい。

「それで、頼んだ品のほうは全部手に入ったのか？」

「他ならぬ御曹司のご用命ですからな。こいつは南蛮人から仕入れやしたんで、ちと値が張りましたわい」

友よ 第3回

穴喰屋は脇に置いていた風呂敷から、袱紗ふくさを取り出して、開いた。中から現れたのは、瑠璃るりの首飾りだ。

「おお、俺はそういうものが欲しかったのだ」

信親が手を伸ばすと、穴喰屋は袱紗ふくさの端はじを引っ張って、すっと引っ込めた。

「こいつを、どう使われやすんで？」

「頼みである京の紅と手鏡と共に、るいに贈りたい。女子は美しくありたいものだと言う。るいは質素な身なりをしているが、本当は着飾りたいはずだ。るいから生業なりわいを奪ったのは俺だ。償いもあるが、喜ばせたいのだ」

「居所きょしょもわからんのに、どうやって届けなさる？」

穴喰屋は焦点の合わぬ眼で、いくぶん哀れおように、信親の顔を見ている。

「お前が探してくれ。何でも売ってくれると評判ではないか。金はいずれ何とかする。これも渡して欲しいのだ。字が読めぬそうだが、俺からの恋文だと伝えてくれぬか」

信親は紐で縛った紙束を部屋の隅から抱えてきて、差し出した。

穴喰屋は意味もなく、片方ずつ順に福耳を引っ張っている。さらに福耳を大きくできれば、もっと儲かるとでも考えているようだった。

「お引き受けいたしやしょう」

ただし、信親の代でも、今まで通り穴喰屋を御用商人として扱うよ

友よ 第3回

うにと、条件を付けてきた。

「いまひとつお約束を。ご正室にはいずれ、御館様がお決めになった姫をお迎えあるべし。よござんすな？」

宍喰屋は元親の懐刀とさへ言えた。父子の利害が対立する場合、国主を差し置いて、たかだか十五歳の御曹司の便宜を図りはすまい。それでも信親は、藁わらにもすがる思いで頼んだ。真摯まじな思いが元親に伝わり、この恋を許してはくれまいかと、甘い考えさへ抱いていた。

このままでは永遠に、るいとるいの繋がりが切れてしまう。それは嫌だ。今はとにかく、ささやかでもよい、るいと繋がる糸を持っていたかった。

「承知した。して、この品はいつるいに届く？」

「はて、これから考えやすが、急せくと女心はかえって離れてゆくもの。時を掛けたほうが良い場合もございやすぜ」

信親の眼前で、宍喰屋は大切そうに瑠璃の首飾りをしまい込んだ。



十

すっかり桜も散り果てて、春が駆け去ろうとしている。

信親は槍の片鎌に覆いを付けた。隼人に稽古を付け直してもらい、かろうじて戦には間に合いそうだ。今はむしろ戦場で暴れたい気分だった。

「若様、出陣の支度がすっかり整いましたぞ」

出丸にやってきた弥次郎は、見違えるように精悍せいかんな表情をしてい

友よ 第3回

た。武芸で体を鍛え抜くと、顔つきも引き締まってくるものだ。

「また少し背が伸びたな。薙刀のほうはどうだ？」

弥次郎は夜明け前に薙刀を手に岡豊城を出て、師の太平が住む城下町の南のはずれで、稽古を付けてもらっている。

「次の戦場では力試しをしてみよと、師からお墨付きを頂戴しました」

「頼もしい限りだ。さてと、彦十郎も誘って、川歩きでもするか」

例によって書物の山に埋もれている同居人に声を掛けると、気散じになるからと乗ってきた。

川風に吹かれながら、三人で石清川の川べりを歩く。

信親は三日月淵の河原に立った。

——ここで、るいと会ったのだ……。

石清川はあの時と同じように青く澄んで、静かに流れていた。川は人の姿だけでなく、人の心を映し出してもいる。

子猫には向ける笑みと眼差しを、るいは結局、信親に向けてはくれなかった。いや、るいはきつと、この世の誰に対しても、同じなのだろう。

贈り物は届いたろうか。今度るいに会えば、きっと信親に向かって微笑んでくれる気がした。

信親の恋患いも少しずつ癒えてきた。

「若、良くも悪くも、恋を忘れられる方法がござる」

友よ 第3回

るいを忘れるつもりはないが、信親は彦十郎の物言いに関心を持った。

「そんな都合のよいものが、この世にあるのか？」

「乱世には、ござる」

彦十郎が浮かべる自嘲めいた笑みで、信親はピンと来た。戦か。

「次は、どこだ？」

「若の恋患いの間も、見えぬ戦は続いており申した。讃岐の羽床城攻めでござる」

戦と聞くと、信親は新目弾正を思い出す。無名でも、生涯の目標とする将だ。

「こたびは、どんな将に会えるのであろうな」

「羽床資吉と申す、金砕棒かなさいぼうを使う万夫不当の若き豪傑がおるとか」

「今度こそ、その男をわが一手に加えられぬものか」

「戦には勝てますが、藤目城の例ためしもござる」

「若様、すべては、巡り合わせでございましょう」

弥次郎の言う通りだ。るいとこの恋も同じだ。それでも、信親はまだ諦めていない。



十一

淡い月明かりの下、るいは小さな手鏡で自らを映した。貫った紅くまにを小指の先に付け、唇にそっと塗ってみる。

これまではあまり自分の顔を見たことがなかった。化粧らしき真

友よ 第3回

似をしたのも初めてだった。

——これが、わたし……。

しばし見とれていた。まるで別人のような気がした。女たちが鏡ばかり覗き込んで、自分の顔をしげしげと眺め、身だしなみを整える理由も分かる気がした。

言われてみると、すっかりした顔立ちだ。首もとには、実喰屋が持ってきた瑠璃の首飾りが輝いていた。長宗我部の御曹司からの贈り物だという。

ひたむきに話しかけてくる信親の姿が脳裏に浮かんだ。愉快そうに笑うと、真っ白な歯がこぼれる。なぜか川の話が多かった。さして川に関心はなかったが、とっておきの宝物を一つひとつ取り出して見せるように、信親は幾らでも楽しげに川の話をした。

るいは、鏡に向かって笑ってみようとした。

最初はうまくできなかった。それでも何度か試すうち、それらしくなった。信親のことを考えているせいかな。

突然、唇の赤が血の色に見えた。なのに、心に波風ひとつ立たぬ自分が恐ろしい。幼い頃から血の川で溺れる夢を毎晩のように見てきた。いつしかあれを見なくなったのは、現世うつしよと夢の中がさして変わらなくなってきたせいかな……。

さっと月影が消え、辺りは急な闇に包まれた。月が厚い雲の陰に入ったらしい。

友よ 第3回

るいは、脇に置いていた懐紙で、唇の紅をすっかり拭き取った。
似合わぬ真似をしたものだ。

身の毛もよだつるいの素性を信親が知ったなら、若く愚かな恋心
など、瞬く間に潰える。今さら、るいが女としての幸せを求めるなど、
身の程知らずで罰^{ばち}当たりだ。

おまけに相手は、あの長宗我部の御曹司ではないか。

暗がりの中で、瑠璃の首飾りをそっと外した。自分には全然、相応
しくない。

るいは力を込めて引きちぎろうとしたが、信親の笑顔が思い浮か
んで、やめた。

再び淡月が光を取り戻し、るいの放り捨てた懐紙を照らし出した。
信親のくれた真っ赤なはずの紅は、濃鼠色に見えた。

(つづく)